

黒川正剛著

『魔女狩り』

——西欧の三つの近代化——

(講談社選書メチエ 571)

講談社 二〇一四・三刊
四六二二頁 一七〇〇円

西欧の魔女迫害は、中世ではなく近代の黎明期にその全盛を迎えた。本書は「視覚を中心とする感覚の近代化」「自然認識の変容」「他者・社会的周縁者の排除」という三つの近代化を分析視角として、魔女狩りとヨーロッパ近代の誕生との連関を明らかにしようとする意欲作である。氏の研究は魔女狩りそのものに対象を限定した歴史研究ではなく、ヨーロッパの知識人たちの魔女をめぐる言説分析を軸としつつ、大きな枠組みでの人間文化をとらえようとするものであり、人類学や文化論の領域と重なる。

三つの視角のうち、他者性の問題は著者の博士論文『魔女とメランコリー』(二〇一二年、新評論)に詳しいのでこちらも参照されたいが、とりわけ本書で核となるのは「視覚」であり、自然認識もこれと深く連動する。著者は、第一章、第二章で異端の集会や悪魔崇拜、乱交といった負のイメージが、想像上・幻想上の事柄を真実かつ現実的な事柄として描写・知覚する「視覚的・認識論的錯誤」によって成立したことを指摘する。これと関連して、自然もまた動植物や気候といった今日的意味のみならず、神によつ

て創造された永久不変にして不可侵のものという宗教性を付与されていた。

第三章では魔女狩りが猛威を振るったバロックの時代とされる十六世紀末から十七世紀に焦点があてられる。真実よりも見た目の「真実らしさ」を重視し、現実と幻想が混在する表象不可能なものを表象しようとする「視覚的リアリズム」をバロックの特徴とする視覚文化論と、魔女迫害がリンクするのである。フランス・バスク地方の魔女裁判の事例では、裁判官の意識に深く根を下ろした「視覚的・認識論的錯誤」と、近世フランス王国の絶対主義伸長における排除と統合の働きとが相互連関的に検討される。魔女と国家形成との関わりは歴史的魔女研究の柱の一つであるが、これをバロックという時代相から読み解くところに本書の独自性を見ることができよう。

第四章では「デカルト的遠近法主義」の成立を、デカルト、トマジウス、ベツカーラのテキストから分析する。世界を外側から合理的・客観的に視る主体性を与えられた「視の特権化」により成立したデカルト・バイコンの近代世界では、魔女の存在する余地は残らず、自然もまたその宗教性を失い、客観的観察と探究により明らかにされるものとなった。こうしてヨーロッパにおける「視の制度」の変化が、魔女裁判の終結をもたらしたという仮説を提示する。

本書は新書の体裁ではあるが魔女狩りの概説ではない。視覚文化論を歴史的次元からとらえ、同時代の知を再構成した労作である。それだけに、本書に注が一切ないのは出版事情とはいえ惜し

まれる。「おわりに」で示された「現実」「真実」という言葉の語用論的フィロロジー、視覚以外の感覚と近代化、ユダヤ教徒と魔女の関係など、今後の著者の研究の行方に注目したい。魔女研究がはらむ可能性を豊かに示してくれる一冊である。

(小林繁子)